

## 演劇の手法は情報伝達に有効か ～防災ワークショップのファシリテーター養成講座の実施報告～

特定非営利活動法人可児市国際交流協会事務局長 かかむ 各務 眞弓

### ■ 防災ワークショップの ファシリテーター養成講座

2011年度に可児市国際交流協会では、「防災ワークショップのファシリテーター養成講座」という在住外国人の自立支援事業を行いました。この事業は、演劇の手法を生かし、情報伝達手段の一つとして、多言語で対応する防災ワークショップのファシリテーターを養成するものです。その取り組みの一つとして「演劇手法を用いた多文化共生への取組～外国人の防災への活用性～」というテーマでシンポジウムを行いました。

防災ワークショップのデモンストレーションとパネルディスカッションを行い、パネルディスカッションでは可児市文化創造センターの衛紀生館長がコーディネーターとなり、パネリストに静岡文化芸術大学の池上重弘教授、NPO法人多文化共生マネージャー全国協議会の高木和彦副代表理事、アドバイザーとして愛知淑徳大学のブイ・チ・トルン教授をお迎えし「演劇手法は情報伝達手段として有効か」をテーマにディスカッションと検証を行いました。



ワークショップのデモンストレーション

養成講座では、22回の研修を通じて、防災意識に乏しい在住外国人に向け、演劇とワークショップにより

防災知識の共有を図るとともに、多文化共生を体感してもらうためのプログラムを開発し、4回

の外部実践を実施しました。また、別途ブラジル人向けの実践や、滋賀県主催の研修にも参加し、実践を通して振り返りながらプログラムを見直しました。さらに、外国人集住都市会議飯田大会の事前研修会においても、デモンストレーションの機会をいただき、研修に参加された行政関係者にもアピールしました。

### ■ 多文化共生プロジェクト

この「防災ワークショップのファシリテーター養成講座」を実施するに至った経緯は、可児市の文化事業として、多文化共生の取り組みがあったからです。可児市には、文化活動の拠点として可児市文化創造センターala（以下、アアラ）があります。可児市国際交流協会は、多文化共生センターフレビア（以下、フレビア）を管理運営し、フレビアを拠点として活動していますが、フレビアオープン時の2008年から、まちづくりの一環として、外国人コミュニティとの接点がなかったアアラと連携し、日本人と外国人が一丸になり舞台作品を作り上げる「多文化共生プロジェクト」を実施してきました。

多文化共生プロジェクトでは、地域で暮らす国籍の異なる人たちが、ミュージカルや戯曲を取り入れたお芝居に登場し、歌ったり踊ったり演じたりします。演劇の部分では素人の演技だった人たちが、劇中挿入されるドキュメンタリーの部分では、見違えるような表現力で自らを語ります。障がいのことや、生き立ちを切々と語る姿はとても感動的で、一人一人の人生が垣間見え、胸にジーンと伝わってきました。



ワークショップの研修1



ワークショップの研修2

この多文化共生プロジェクトは毎年参加者を募集し、構成兼演出の田室寿見子さんが、一定期間可児市に滞在し、参加者へのインタビューやワークショップを重ねて作り上げていきます。本番では、人の動き、音、照明、映像が効果的に入ります。ワークショップの様子をのぞくぐらいでは、どんな作品に仕上がるのか想像もつきません。しかも全員がそろって練習する時間は限られるため、苦労も多くあります。なんとといっても、時間の感覚や、約束が必ずしも優先されないことなど、日本人と外国人の考え方の違いが、多文化共生の大変さであり、参加者すべてがこの大変さを体感したことでしょう。しかし、この多文化共生プロジェクトは、初演から高い評価を受け、欧州評議会の視察があった際にもDVDでの上映と、出演者との意見交換が行われました。

2008年以降、世界的な経済危機の影響から可児市の在住外国人の動向もこの5年間で大きく変化し、在住外国人の数は、帰国や国内転居などによりピーク時の約7,400人から2,000人近く減少しています。最近では、ブラジルの人たちが減少する一方、フィリピンの人たちが微増しており、課題はフィリピンの人たちに移行しています。このような状況の中で、毎年、多文化共生プロジェクトは上演を重ねてきました。3度目の上演後、田室さんから「演技力、指導力のついてきた人たちが、趣味ではなく将来的に仕事としていけるような支援ができないだろうか。自分がいつまでも関われない演劇を仕事にすることは難しいが、ファシリテーターとしては、自立の可能性があるのではないだろうか」という相談がありました。そこで、課題となっている「災害時の情報伝達」あるいは、「防災意識の啓発」ということに、演劇手法が使えるのではと、「防災ワークショップのファシリテーター養成講座」を実施しました。

## 演劇手法の成果と今後

この養成講座は、国籍や言葉の違う受講者が、プロのファシリテーターの指導のもとワークショップを通してプログラムを作ることから始まりました。指導者の専門は防犯、しかも外国人への指導は初めてだったため試行錯誤を繰り返し、まず「災害時に自分の身は自分で守る」ためのプログラムを作り上げました。受講者が言語を超えて楽しみながら防災を学ぶように、ゲームや多言語のアイテムカードを用意するなど、さまざまな工夫を凝らし、多様な参加者に対応できるものです。言語を使い分け、文化の違いを取り入れ即興で演じ、参加者には好評です。演劇手法が、言語を超え情報伝達に効果的に使われていると実感しています。



ワークショップ実践

この事業では、「ファシリテーターとしての自立」を目的として研修し、各地で実践を重ねることで参加者の自立をめざしてきました。こうして、多文化共生のための演劇ユニット「MICHU」が結成され、活動を始めたことが大きな事業成果といえます。2012年度には「MICHU」は、新たに「ビジネスマナー」というプログラムにも取り組みました。この実践の中から、日系ブラジル人の代表を日本人メンバーが支えるという形ができ、これまで田室さんに依存していたことも、自分たちで考え動けるようになっていきます。今後の「MICHU」の活躍がとても楽しみであり、この演劇手法のワークショップには、さまざまな可能性があり期待を広がっています。